

---

ムガル宮廷画におけるヨーロッパ絵画の受容 - 17～18世紀に関して -

京都市立芸術大学 山本 緑

---

インドにおけるヨーロッパ美術の受容は、日本の場合と同じく16世紀の大航海時代、イエズス会がムガル宮廷にもたらしたキリスト教絵画に始まっている。ムガル絵画と西洋画の影響関係に関する先行研究ではこれまで、主にこれら16世紀末頃のキリスト教絵画の影響を中心に焦点が当てられてきた。しかし本発表ではそれ以降の時代、これまであまり着目されてこなかった17世紀以降のムガル絵画におけるその後数段階にわたるヨーロッパ絵画の受容とその転用の多様性を紹介する。今回あらたにヨーロッパ絵画の影響に関して発表者の新しい見解を提示したい。そこからは東インド会社の拡大という時代背景と、近世から近代への時代の変動を読み取ることができる。

ヨーロッパ美術受容の初期の段階において、キリスト教絵画の図像はムガル皇帝肖像画としばしば重ね合わされており、その背景には王権の正統性を主張するために西欧の世界観を自国のものに变换するというしたたかな発想が存在していたことが指摘されてきている。それは帝国の栄華を極めた17世紀のムガル第5代シャー・ジャハーン帝(1627～1658)の時代においても引き続き、新たに幾つかの複数の要素が皇帝年代記の挿絵や肖像画に取り込まれることとなる。まず挙げられるものが、帝国の領土を目に見える形で図解的に描写できるヨーロッパの都市図である。これらヨーロッパ都市図の鳥瞰的な地図のモチーフは、画面に広い空間をあらわした場面の中でしばしば背景に挿入されている。そして次に挙げられるのは、帝国の権威を記録に残すための戦闘場面の絵画であり、ヨーロッパの戦闘画に登場する兵士達の群集が年代記の挿絵の中に転用されている。またそれ以外にはヨーロッパ騎馬肖像画の影響が見られ、馬に跨り完全な横顔で描写される人物像は、この時代以降のムガル肖像画の典型となってゆく。他にもヨーロッパの燭光画の影響を受けて、蝋燭やランプの灯りと闇を対比させ夜の光景を描いた場面もしばしば見出せる。

さらに18世紀前半の第12代ムハンマド・シャー帝(1719～1748)期には、ヨーロッパ絵画の影響に変化が現れる。それは宮廷風俗画の中に繰り返し描かれる左右対称の白大理石の宮殿建築の出現である。これらの絵画では前景に描かれる人物の背後には線遠近法的な建築空間が独立して広がっており、その透視図法的な建築描写は、ヨーロッパの建築画、特に18世紀のヨーロッパの庭園建築の図案集と比較できる。18世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパでは庭園を造りたい者はレディメードの庭園装飾物をカタログ化した図案集の中から気に入ったものを選び注文を行っており、このような図案集が当時東インド会社を通じてインドにもたらされ、ムガル絵画の肖像画や風俗画の背景描写に取り込まれた可能性が考えられる。ムガルの伝統的な風俗画や肖像画の図像に組み合わされた、線遠近法的な庭園建築の空間表現は、それが皇帝や帝国の権威の表明、そしてそれを記録するという目的と何ら接点を持たないことから、ムガル帝国の権力がすでに衰退したことを暗示する。それ以前のムガル絵画の、写本の主題を中心に記述する首尾一貫した描写法は転換を見せ、建築の細部や風景描写により深い関心が向けられている。このようなムハンマド・シャー期の絵画の建築や風景描写への傾倒は、これまでの絵画表現の基準が大きく転換するものであり、それはその時代の揺らぎと近世の栄華の終末、そして来る植民地時代への胎動を意味していた。